

平成 21 年 04 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18330202

研究課題名（和文） 語用障害の補償が高機能広汎性発達障害をもつ子どもの伝達技能の習得に及ぼす影響

研究課題名（英文） Research on the influence of maternal compensation of pragmatic impairments in children with high-functioning-pervasive developmental disorders on their learning communication skills.

研究代表者

大井 学（OI MANABU）

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：70116911

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：語用論、高機能広汎性発達障害、会話

1. 研究計画の概要

高機能自閉症及びアスペルガー症候群をもつ児童・生徒が会話において示す語用障害（典型としては不適切な言語行為、会話の規則の逸脱、文脈情報利用の失敗など）を、会話の相手となる保護者や通級指導教室の教師が補償する（子どもの意図の明確化に基づいて適切な発話モデルを示す、会話の規則に従うよう促す、文脈情報を明示して利用を助けるなど）ことが、これらの児童・生徒のコミュニケーション・スキルの習得にどのような影響を及ぼすかについて検討する。

2. 研究の進捗状況

18年度に6歳から15歳までの高機能広汎性発達障害（HFPDD）児20名あまりと母親との会話（各15分間）から見出された語用障害は17種類に分類され、4事例以上で認められたのは、疑問詞質問への無応答、相手の発話の先行会話の文脈への関連付けの失敗、過剰に特殊な対象指示、及びFTA（Face Threatening Act）の4種であった。また、高機能自閉症の2名の男児の意図を大人が理解できなかったプロセスで、大人が意図の明確化を誘発するために用いた疑問詞質問は子どもの意図の明確化に失敗したが、はい・いいえ質問は意図の明確化に適していた。後者による明確化の失敗は、前者によって補償されていた。これは臨床言語学の国際誌に掲載され、英語圏・中国語圏の研究者から関心を集めた。19年度は、この関係をより多数

の子どもで確認するために、HFPDD群、コントロール群各12名について母親の疑問詞質問とはい/いいえ質問への子どもの応答が、十分か、それとも意味的に不十分または語用論的に不適切かについて比較検討した。HFPDD群はコントロール群に比べて、疑問詞質問への意味的に不十分な応答が多く、語用論的に不適切な応答は質問形式にかかわらず高機能広汎性発達障害群が著しく多かった。これについては現在自閉症専門の国際誌に投稿し審査中である。20年度はこれらの結果を受けて、高機能広汎性発達障害群とコントロール群のナラティブと、質問への応答の十分さ、応答失敗への母親の補償等との関連の検討を開始した。その結果、HFPDD群では再話命題数は、疑問詞質問およびはい・いいえ質問への十分応答率と有意な正の相関を示したがTD群ではこのような変数間の有意な相関はほとんど見られなかった。HFPDD群のナラティブは質問に十分応答する割合・失敗する割合と有意に相関し、TD群ではそのような相関は見られない。母親の質問に十分な応答ができることがHFPDD群ではナラティブの能力と関連しており、それが低い場合母親が応答失敗を補償する率が高かった。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

多彩な語用障害を幅広く把握し、それへの

補償を包括的に取り上げて、コミュニケーション学習への影響を詳細に検討しようとしたが、一千を超える会話失敗エピソードにおける補償と伝達成功の関連を、それぞれピンポイントで捉えることはできたものの、それらを包括的な数量的処理に移すパラダイム設定の困難を解決するに至らず、当初の研究目的の達成は完全な成功に至っていない。

しかし、質問への応答技能に絞込んでデータを整理したところ、疑問詞質問とはい・いいえ質問という質問形式が予想外に子どものコミュニケーションに大きな影響を与えていることを発見でき、それと子どもの重要な語用スキルの一つであるナラティブが関連していることが示唆された。これは当初の目的を、やや違った形ではあるものの、迂回的に目標を達成しつつあるという意味で順調と評価できる。なお、副次的研究目的である異文化比較では、日英バイリンガル高機能自閉症児の追跡研究を19年度から継続しており、また、台湾におけるHFPDDとTDとの母子間質問応答に関する研究を実施済みである。

4. 今後の研究の推進方策

方策は3つある。1つは質問への応答技能、および応答失敗に対する母親の補償が子供のナラティブ・スキル発達に縦断的にどのように関連しているかを検討することである。これは21年度に入って既に一部着手しつつあるが、少なくともナラティブの起動にかかる情報処理負担を、縦断的には母親の補償が下げている可能性が示唆されつつある。さらに約20名の3年間にわたる、ナラティブの量と質(因果性、意図性の把握など)の変化と母親の補償(文脈質問、精緻化質問)との関連が明らかになれば、当初の目標は相当程度達成されたこととなる。

第2は、多様な語用障害への異なる手法による多彩な補償の量的な評価法を探索し、子どもの応答の充分さや適切さの縦断的变化(これは数量的な把握が可能であることが20年度の研究で確認できている)との関連を検討することである。これに成功すれば、目標はおおむね完遂されたこととなる。

第3は、補足的な方策として、別の科学研究費補助金「萌芽研究」課題番号19653121により完成に近づいているChildren's Communication Checklist-2の日本語版を語用技能評価の別の尺度として用い、補償の量的評価との関連を検討することである。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Oi, M. Using questions words or asking yes/no questions: Failure and success in clarifying the intentions of a boy with high-functioning autism. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 22, 814-823, 2008、査読有

大井 学 10歳から11歳の波乱を超えて: 仲間及び母親とのコミュニケーションへの支援. *アスペハート*, 17号, 18-23, 2007、査読無

大井 学 (高機能広汎性発達障害にともなう語用障害: 特徴、背景、支援). *コミュニケーション障害学* 23巻2号 p87 - 104, 2006、査読有

[学会発表](計4件)

大井 学 高機能広汎性発達障害をもつ子どものナラティブ: 母親の質問への子どもの応答性との関連. 日本特殊教育学会第46回大会, 2008, 9.18, 米子

大井 学 アスペルガー症候群または高機能自閉症の子どもの母親の質問への応答性: 疑問詞質問とはい・いいえ質問との比較. 日本コミュニケーション障害学会第34回学術講演会, 2008, 5, 1, 大阪

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計 件)

[その他]

ホームページ URL

<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~oimanabu/>